
異世界移転者の凡常

北澤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界移転者の凡常

【Nコード】

N3520Y

【作者名】

北澤

【あらすじ】

テンプレよろしく異世界に飛ばされたネトゲ廃人たちの日常。
全5話ぐらい。

予告無きエロ・グロ・スカ・スプラッタ・差別表現があります。ご注意ください。

序：移転者は異世界で踊る

「天気いいなあ……」

「だあねえ」

空はどこまでも青く突き抜けて高い。

行ったことなどついぞなかったが、TVで見た南国リゾートの空はこんな感じだったな、とほむほむらぶは呟いた。

ほむほむらぶとはかつてのハンドルネームであり、現在の通称だ。とはいえ呼ぶのはプレイヤーに限られるし、決して”こちら”での本名でもない。

「まあここも外国には違いないわなあ」

相変わらず気の抜けた調子でティーザラス——こちらも無論、かつてのハンドルネームである——ティーザラスが同意した。

背後にはるか高くそびえる火山。その中腹にまばらに生えた木々の森が点在する一角、眺めの良い崖の上。二人は眼下に広がる裾野、シュールレル森を眺めていた。

「とにかく天気は良いしい、風は気持ちいいしい、飯も旨い。ついでに空は青くて綺麗ときたもんだあ……最高だねえ」

「そんで環境音楽はぞぬトレインしまくった間抜けの悲鳴か。落差激しいわ」

「いやあ、血しぶきの鮮やかな赤と青い空のコントラストがたまりませんなあ」

「確かに」

のんびりと同意し、二人は食事を続ける。

薄くスライスしたパンで、大量のグランゾ鶏の焼き肉とリバス草を挟んだサンドイッチは、かつての世界の照り焼きサンドとよく似て”プレイヤー達”には人気の食事だ。

だが二人がこれを昼食に選ぶのは、味とは別の理由である。不味い食事は気力が萎えて効率が下がるが、普通であれば腹は満たされる。つまりこれを選ぶ理由とは、立ちながらも片手で時間を取らずに食べられる。ただそれだけだった。

「横殴りマナー違反ですしおすし」

「ういいうい」

崖から覗く戦闘は一向に好転せず、惨憺たる有様だ。

グレイウルフの牙と爪に引き裂かれ、あっけなく四肢が散らばる。かつてポリゴンで構成されて欠けることのなかったアバターは、今はステータスに依存したただの肉の塊だ。

眼下に見下ろす惨状は、森の長閑さと相まって現実味が薄い。周囲にはむせかえる程の血の臭いがするのだろう。しかし、風はこの崖の上まで死臭を運ぶことはなく、現実味はモニタの向こう側の”リアル”となんら変わらない。

「無双で効率レベ上げ目論見？」

「経験値美味しいれすしなあ」

グレイウルフは大量に湧き続ける上に好戦でターゲットを継続して取り易いモンスターだ。素早い物理攻撃しかない上に魔法耐性が低く、纏めて駆逐し易い。”エンドレスぞぬ祭り””わんわんフィーバー”等々、中位レベル帯の経験値集めで人気の場所だ。

とはいえ、厳密には職業によって効率が良い狩り場というのは異なる。

「僧侶と侍、忍で来るとはねえ。三匹が切る？ロープレ馬鹿かあ……。ぞぬ相手に物理で殴って数に対抗とかまじブギヤー！」
「ジャポニカわるすわるす。せめて侍3で派手に散ってこいやラストサムライっ！」

いずれの3つとも、防御の薄いことで有名な中位レベルの職業だ。ただし回避と瞬間火力が異様に高く、即死のクリティカル率も高いので、レベルと環境が適正ならば回避盾かつ火力として重宝される。さらにそれぞれの違いをあげるなら、僧侶は防御高めで生産可能。侍は攻撃特化。忍は素早さ特化で隠匿性能がある。

「掠るだけでアウアウ。紙装甲の極み乙！」

ライトノベルを正しく反映したかの様な、デスゲームと化した現在ですらロールプレイを続ける者は存外多い。

それで精神安定を謀っているのか、あるいは正しくこちらに”適応”した結果なのか、

ほむほむらぶにもティーザラスにも未だに解らない。

「またタゲる順番間違えてやんの」

「モンス、位置表示もHPバーも無くなったしねい」

「表示を探すんじゃない。気配を感じるんだ！」

「ですよねえ。いやはや断末魔がマジ渾身のギャグ」

悲鳴を聞きつけたのか、違う群らしきグレイウルフの集団が合流し、さらに数を増す。

「シャウトでぞぬ倍プッシュ召集！」

「ぞぬ達のバトルフェイズはまだ終わらないぜいッ！」

「おーっと、ラスト僧侶アボン！」

プレイヤーならば——少なくとも現状でバトルジャンキーと呼ばれる彼らのような廃人たちならば、5分とかからず戦滅できる雑魚モンスター群れにすぎない。だが、この世界の大半の人間には免れぬ死の象徴であり、恐怖の対象だった。

そして、先ほどの3人の様な、この世界に適応できなかったかつてのプレイヤーにとっても。

「あ、こつちや側も沸いたかね？」

「みたい」

「じゃあメシ喰ったし、行きまつか」

「ういいうい」

肌を撫でるような感覚が辺りに満ち始める。聞こえるのは先ほどと変わらぬ、風と木の葉のざわめく音だけだ。しかし、大量の生き物が生息するかのような気配を、何かが息を潜めているかのような周囲の変化を感じて二人は後ろに振り替えた。

インベントリにパンの包み紙と、手首にぶら下げていた水筒を放り込んだら戦闘準備は完了である。

「ここももう1レベル上げておしまいかね」

「確かに。そろそろ効率悪くなってきたしねえ……。次、地下潜りに行くぞうず！」

数値が見えるわけでは無いこの世界では、レベルの概念は無い。ただ何か脳裏にステータス的なものが浮かび上がるような、極めて感覚的なものがあるだけだ。しかしそれはたとえ数値化されていない感覚的なものであっても、明確に、細部まで解る”何か”だ。

ただし、その詳細かつ明確な何かは自分だけの感覚であり、他人

やモンスターのステータスを計ることはできない。とはいえ個人差があれど、経験に基づいてなんとはなしに程度を判別は可能である。

「あゝ、俺アリンコ苦手だわ」

「ええー?! エサえええほ運ぶところがまじピクミンで可愛いやん。ピクミン好きの俺歡喜!」

「ピクミン言うなや! つかエサって、ガチ死体、肉団子だつちゅーの。明日の俺らよ、アレ。FOS考えると壁と回復足らんし、デバフ怖えーおす」

頭を振るほむむらぶを横目にティーザラスは小首を傾げて答える。

「じゃあー、よっすん呼ばーよ。無料壁付いてくるし、マージン十分取れるしょ」

「知能犯乙! そうしよう。しかしよっすんスゲーわ。尊敬する。ネカマっぷりマジ女神。未だに気付いてない無料壁哀れだの」

拍手のジェスチャーを繰り返すほむむらぶに、したり顔でティーザラスは返した。

「可哀想にのう……。しかし、これもいきもののサガか……」

「いや、男のдар。ピンポイント下半身で」

「ですかあ」

「ですよ」

掛け合う二人の目の前、茂みを掻き分け、木の枝を揺らしながら人間の背丈の倍ほどのほどの熊が複数匹現れた。

「とか言ってるうちに、熊ブー大量リンクキタコレ」

「赤ベアらつきーい！おいでませ経験値！タゲ取る手間省けた」

装備された剣を鞘から抜き放つ様に”出現”させて、ほむほむらぶはレッドベアに向かって駆け出した。

「じゃ、さくつと狩りまつか！」

「おけ」

追隨するティーザラスの支援魔法を受けた刹那、剣を振り上げレッドベアの首をはね飛ばす。

「イエスツ！確瞬っ！」

「おめっ！」

ほむほむらぶは器用にも左手のみのガッツポーズをとりながら、右手に持った剣は目の前のレッドベアの突き出した腕ごと切り落とす。その巨体を盾に左右のレッドベアの攻撃を避けると、間髪入れずにティーザラスの放った魔法の矢がレッドベア達を襲った。

矢に縫い止められたかのように一瞬硬直したレッドベアの、その首を狙ってさらにほむほむらぶは剣技を放つ。次元ごと切断させたかのように数匹分の頭部が地面に跳ね落ちると、残りのパーツ——頭部を失った巨体は、そのまま立ち尽くした。

半瞬のち切り取られた首部から噴水のように血が迸り二人に降り懸かる。が、吹き出す血しぶきを既に後にして、茂みを飛び越えながらもティーザラスは再び魔法を放った。

戦闘開始からの攻撃可能距離、移動速度、詠唱時間、コマンド入力後の発動時間、アタック・ガード時における硬直時間、MP消費率。

すなわちコンシューマーゲーム標準値1秒60フレーム内におけ

る省エネかつ効率的戦闘の確立。

彼らは戦闘狂であり検証厨であり効率厨であり、そしてなにより正しく廃人であった。

「俺TUEEEEEEE！！IYAHOOO！異世界最高ッ！マジ楽しいですしおすし！！」

「強いは正義だぁお！キリッ！」

シュールルの森の奥、カベン洞窟の手前。ここはかつてのゲーム時代、効率の良い上位初期レベルの狩り場として有名だった。

現在この世界では”旧世代”のなごり。高レベルモンスターの生息地として記録に残されている魔境であり、”深淵の地”のひとつである。

——そして、移転者たちは今日も異世界で踊る。

1 : 異世界移転者の物語 上(前書き)

第1話概要「変態だ——!!!」(A A 略)

1 : 異世界移転者の物語 上

部屋には咽るような生臭さが漂っている。

粘着質な水音に被さって、肉が打つ音が響く。脚を抱えて腰を振る男が果てると、周囲を取り囲む男の1人が弛緩した体を押しのけて交代した。

男は遠慮なく挿し込んで、しみじみと快楽を追った。

「ああ……たまんねえなあ……っ！」

最高の女だ。何度やっても具合がいい。体つきもいいが、なににより顔がいい。滅多に見ないほど美しい女だ。

だが美しさよりも、恐怖に怯え、強淫に戸惑い咽び泣く様が堪らなくそそる。

強要された快感を堪えて、まぐわう男の服の端を握り締めるのも初心くていいし。口内にも押し込まれて苦しいのだろう。時折縋るような目を向けるのが余計に気持ちを高ぶらせる。

体液に塗れてなお輝く銀髪も、涙に濡れた紫紺の瞳も、奴隷としての価値を一層高めるだろう。だが。

男は腰を打ちつけながら周囲に目を向ける。

取り囲んだ自分の部下たちも、いや自分も、この女を売るなんて当分できない。少なくとも飽きたとを感じるまでは。

今までは自分も部下も、売り物として壊れる様な扱いはしないできた。だがこの理性を吹き飛ばすような気に駆られるのはなぜだ？破壊衝動など無かったはずだ……。

女の身体が跳ね、引き攣るように絶頂を迎える。切なげに歪んだ

瞳から涙が零れ落ちて頬を伝う。脱力した体は過ぎた快楽を受け止めきれずに、小刻みに震えていた。

「勝手に休んでんじゃねえ。まだまだ後が詰まってるんだからな」

女に構うことなく一層激しく腰を動かす。男は口元を淫欲に歪め、残酷な言葉を告げた。

オフィーリアは力が抜けた身体を叱咤する。半日以上かけて余すところなく酷使されて汚れた身体は愚鈍で、指先を動かすことすら困難だ。

やっこの思いで腕を持ち上げると、背を向けた男たちに伸ばした。

「……あ。……お願い……… いかないで……… え」

振り向いた男たちに見せるよう、オフィーリアは物足りなげに腰を動かし膝を広げる。注ぎ続けられた体液が、快楽に痙攣にするたび緩く溢れ、床に滴る。

「……おいおい」

哀願するオフィーリアのあまりの姿に、部屋を出ようとした男たちは足を止めた。

満足した筈の怠い体に再び力が籠る。勝手に湧き上がってくる唾を、喉を鳴らして飲み込む。瞳を姪奔に潤ませたオフィーリアを舐め廻す様に見ると、下卑た笑みを浮かべて嘲罵を浴びせた。

「見るよあの淫売、まだ足りないらしいぜ」

「あーあー。すっかり好き者になっちまって」

「可哀想になあ……」

「まあ、俺達がこれから毎日たっぷり可愛がってやるから、安心しろよ」

哄笑する男たちの言葉が聞こえたのか、オフェーリアは嬉しそうに笑うと、震える指先を先ほどまで男たちを受け入れていた部分に這わせ広げた。

「もっ……とお……」

男たちの視線が一瞬交差する。

肩を竦めて笑い合う。そうして、床に肢体を擦りつけて悶えるオフェーリアに近づいた。

「……しかたねえなあ……」

そう、満更でない声でばやいたはずの男の言葉は音になることはなく、頭部ごと消え去った。

吹き出した体液が薄汚れた天井を塗り変えて盛んに滴を垂らす。まるで雨のように降り注いでは視界を鮮やかに染める。オフェーリアは赤白の体液に濡れた体を振わせ、奔る快感を反芻した。内壁に貼りついて零れ落ちる感触に煽られて、息を荒げる。

「はあ……っ！」

オフェーリアは愉悦の溜息を吐く。

ひどく艶かしいその姿を見る者が居れば、本能に抗えずに襲いかかったらう妖艶さだ。だがもう此処に、オフィリアを目にする者は居ない。先程までオフィリアを嬲っていた男たちは、その逞しい胴体のみを残して床に倒れていた。

十分に噛み締めた快感を名残惜しげに払い、ようやくオフィリアは立ち上がる。

ゆっくりと肩を回し、首も解す。酷使した腰を存分に伸ばし終えると、形の良い唇から酷くそぐわない言葉を吐き出した。

「あゝたまんねえ。女の体ってほんといーわあ……！」

——キャラクターネーム”オフィリア”こと、ハンドルネーム”ヒヨシ”は、筋金入りのネカマ、だった。

異世界の中心で、これが俺の性癖です！と、高らかに叫びたい。

眉を顰め白眼視され、変態と罵り蔑まれようが——ありがとうございます！我々の業界ではご褒美ですっ！——かつての常識もネットマナーも糞もあるか。ここでは肉体が女なら、女以外の何物でもない。

何言われたところで、もともとネカマですし？最初からオフィリアは姫ブレイ専門で作ってますが何か？ってな感じだ。

開き直り？いいえ、違います。

むしろおっさんだからこそ、男だからこそ、今あえての女体化！自主的女体化プレイ！！異世界で必須のTS展開万歳！である。

育て上げたキャラはとても可愛い。ちくりちくりとレベルを上げ、職業とスキルの選定に散々悩んだのだ。可愛いに決まっている。愛着もある。

何よりどれだけアバター設定に苦労したと思っているんだ。仕草ひとつ、話し方ひとつにだって死ぬほど気を使っていたわ！

——だがしかし、所詮は”キャラクター”だ。

そもそもこのゲーム”Annals of Netzach Baroque”において、キャラとは切り替えの出来る手札にすぎない。

いや、これは廃人の弁か。

一般的な話をするならば、1アカウントに対し、通常2キャラを制作できる。1人2垢までだ。それ以上は発覚次第、手持ちアカウントをランダムにBANされる。BOTザマア！と言うわけだ。

2nd以降のキャラ制作条件は、最初に作ったキャラのレベルを、初回上限までカウンターストップさせることだ。カンストといっても、廃人と呼ばれるほどやり込む必要はない。RPG慣れしていれば初回上限程度、普通の人間でもたいした苦労もせずに到達できるだろう。たった80時間程度だ。

2ndキャラ制作可能になると、1stキャラの初回上限は解除

される。

もし2ndキャラ制作後にさらに別のキャラを作りたくなつたのなら、高い金をその都度運営に振り込めばいい。1アカウント最大5キャラまで増やせる。

また、最初のキャラと切り替えて遊びたいなら、ホームや街にあるセーブポイントで簡単に切り替えられる。

いちいちセーブポイントに戻るの面倒臭い？だったら、さらにクソ高い金を振り込め。これでいつでもキャラチェンジ可能だ。便利だね。

——ただし、それだけだが。

はつきり言おう。1stキャラを初回上限カンストさせるまでが、このゲームのチュートリアルである。ご丁寧に「Congratulations! Please enjoy continuing!」と表示されるくらいだ。運営はタヒね！

そして2ndキャラからが真のゲームスタートであり、ゲームの本番。いわゆる一つの神髄というヤツである。

1stキャラでは選べなかった職業、スキル、立ち入ることの出来なかつたエリア、これは負けイベントなのか？！と勘違いさせる課金アイテムを湯水のごとく使用しないと絶対に勝てなかつたあのモンスターとのタイマン、ゲームをフルに楽しむための要素の、その取っかかりがようやく解放されるのだ。

そして1stキャラの育てやすさとは一体何だったのか？！と疑問に思うくらいレベルが上がり難い2ndキャラに気付き、必要経験値を調べてはそのあまりの量に啞然とし、なりたい職業に欲しいスキル、その解放クエストの膨大さに絶望する。

それがこのゲームだ。マゾゲーと呼ばれ、ガチ糞ゲーと揶揄され

るこのゲームはそれでも世界でTOP3に入る素敵なVRMMORPGだ。ホント真面目に。

廃人をゲームの名前をもじって、ネットバーカとかメツチャバーカ呼ばわりされたりもするけども。わりとガチで。

しかし廃人達はどう呼ばれようと、ネットゲー特有のマゾさをものともせず嬉々としてキャラを育て続ける。

だって、みんなに頼られ尊敬される俺が画面の向こうの世界には存在しているから！

ワールドワイドかつ膨大な人間が存在するこの鯖——世界で、素敵で無敵な俺が羨望の眼差しを受ける。なんて素晴らしい！俺はなんて凄い人間なんだ！だってみんなミナ俺が居ないと死んじゃうから！

——そうして俺らは、数値と自己愛を積み上げてのめり込む。

耳を澄ませば、シュプレヒコールが聞こえてくるだろう。

ああ、この世界ですっと生きていたい。この世界こそが現実であればいいのに……！

と思つてはいたが、本当に異世界に来たのなら話は別だ。帰りたい。切実に。

何せ不便すぎる。

娯楽は無い。あつてもタルい。アナログとかマジキチ。息抜き用の別ゲーもない。現実ではそろそろ神と崇めるあのゲームの続編が発売する筈だ。なんでフラゲッターの俺がネタバレ喰らう立場にならにやいかんのよ。発売までに帰らねばならない。なによりここには、命の保証も人権もないのだ。ああ、日本て素晴らしい国だったのね。

とにかく面倒臭過ぎるのだ。

今まであたりまえにあった安心感どこ行った？！お前の隣で寝てる？ふざきんな！それは俺のモンだっつーの！

え？そのクソ高いステータスと、ため込んだゲーム内通貨を生かして生活しろって？

バカ言うなよ、働いたら負けだろうが常考。

——とかまでは言わなくても、ノーコンテニューで生活基盤を——から作れとか。どんなクソゲーだよ。ハッピーエンドかベストエンド、最悪でもノーマルエンドしか認めないよ、俺。バットエンドがリアル即死とかなにそれ、面白いわけないだろうがそんなゲーム。いや現実。

第一シュミレーションゲームとか門前外ですから！マジで！！

そんなこんなでのたうち回ってた俺は、ある日唐突に秘められた能力を覚醒させたのだった。

異世界移転物ラノベのお約束である。それでこそ主人公！流石すぎる俺！

——ただし、覚醒したのは力ではなく性癖だったのだが……。

1 : 異世界移転者の物語 中

汚れたままの体をそのままに、インベントリに取り出したアイテムを仕舞う。男たちに”墜ちたオフィーリア劇場”を開催していた時に後ろ手で取り出した物だ。

燻し銀でイチジクの葉を模した細工の上に、花を表す紅く丸い寶石が付いたブローチ。効果は即死。一度の使用で、同じ種類のモンスター——モンスにしか攻撃できない。また別途計算式があつて、基本自分よりうんとレベルの低いモンスにしか効果が発動しない。しかし高位レベルのオフィーリアには使い勝手のいいアイテムだ。例えば、低位モンスの代表格、バウウルフ3匹とレッドドッグの2匹の群が居たとして、このブローチを使えばバウウルフ三匹を即死させることができる。

本来、モンスの影から出た赤黒い攻撃エフェクトが頭部に当たるだけだが、現実で使用してみたところ首から上が消えて無くなった。

「意外にグロかった……」

頭から血の雨を被るつもりはなかったんだが、まあ仕方ない。それにキャラチェンジさえしてしまえば何のことはない。

キャラチェンジの良いところは、アバターが初期状態に戻る、というところだ。

この場合、アレやコレや液体にまみれたオフィーリアが、元の美しい状態に戻ることを表す。野営でも風呂の心配要らず。素晴らしい。

実は当初、キャラチェンジした途端に最初の清らかな軀に戻るんじゃないかと懸念した。毎回破瓜されるんじゃ、面倒臭いからだ。だがその辺は問題なかった。ゲームでも、チェンジされたキャラは

ストックとしてステータス——ステは維持される仕様だったからだ。え？陵辱する側は初めての方が興奮する？ばっか、そんなの演技次第だろうが！猿のごとく突っ込むことしか考えない男が、女の演技を見抜けるわけなからうが！ああ、見抜けないとも！見抜けないんだよクソがッ！！

とにかく、インベントリから出した設置型のフレアボムを死体にセツトすると、部屋を出てキャラチェンジする。再びオフィリアにキャラチェンジ。基本俺は常にオフィリアの姿をとっている。あとは簡素な旅人装備をセツトし、着替える。窓が開いているのを確認して、フレアボムの起動。灰も残さず上手に焼けました〜！で、完了だ。

フレアボムはダンジョンなどに設置して、釣ってきたモンスに喰らわせたり、追加でリンクして来るモンスを引っかけたり等色々使えるトラップアイテムの一つだ。そしてお手軽に死体を処分できる威力がある。残念ながら、俺は死体を丸ごと消すような魔法は持っていないのだ。オイタの証拠は余さず消去。コレ鉄則です。

また、乱交に付き合ってもらう人間は洩れなく犯罪者だ。遠慮なく処理できる。たとえば捕まえて騎士団——ここでの警察にあたる——に突き出したところで、その場で首をはねられて殺されるだけの軽い存在だ。人権？ねーよ、ここにそんなモンは。

この世界はそもそも、王侯貴族、その他で構成された由緒正しい血統差別社会だ。人権も糞もない。ちなみに犯罪者に該当するのは、立ち回りに失敗して更迭された貴族とかだろう。なにせ刑務所なんでものは、王城の地下か、政治犯専門の監獄塔ぐらいしかない。

ゲームの設定として監獄島が存在したが、まだ解放されてないエリアの上、おそらく収拾されているのは人外のクエストモンスだろう。かろうじて街中にある騎士団の詰め所に、牢屋的なものが存在は

していたが、アレは軽犯罪者用で、入れば洩れなく奴隷として転売される。人間を生かして拘束しとくには、場所と金が必要なのだ。人権のないこの世界で、無駄なものだと判断されるのは当然だろう。

「グレイスフル・オフィーリアここに参上！とても素敵でした。ごちそうさまです」

ポーズを決めた俺こと魔法美女、オフィーリアの美しい声が辺りに響く。

正義の味方が悪役に捕まって抵抗虚しく陵辱、王道である。誰しも懂れたシチュエーションである。そして覆せない宇宙の法則である！ああ、本当に素晴らしい！

一応、バックドラフトを警戒してドアを開け、燃え尽きて何も残らない部屋を確認する。体液の跡すらない。未だオブジェクトとして判断されるのか、壁にも扉に焦げ一つないことに驚愕した。だって掘って建て小屋だよ、ここ。むしろ小屋ごと燃え尽きるかと思ったわ。ゲーム設定とは云え、本当に凄えな。

でもって小屋の建つ坑道に一人佇み、軽く手を合わせ祈った。儀式的なもので、感傷があるわけではない。

念のため正義の味方として、他に捕まっている人間は居ないかと狭い坑道を確認して見て回るが誰もいなかった。

「まあそうだろうなあ……」

無数に存在するクエストの中に、フィリップの盗賊たち、と呼ばれるクエストがある。

初心者用のクエストで、盗賊に浚われた恋人を助けたいと依頼されるのだ。ところが、拉致された筈の恋人は盗賊頭のフィリップに絆

されて恋仲になって登場し、フィリップは散々冒険者たちに部下を殺されてきながら改心し、唐突に恋人と共に真つ当に生きていくことを宣言する。宣言されると、なんとそのままクエストが成就して終わるのだ。ビッチクエスト。NTRイベントと呼ばれて大変有名だ。蛇足だが、次のエリアに行くと、改心したはずのフィリップとその恋人が奴隷商人として現れ、盗賊討伐クエストを依頼してくる。何かもう色々台無しだよ！運営はほんとシネ！

と言うわけで、オフィーリアに美味しく頂かれた盗賊たちこそ、フィリップの盗賊たちだった。

「ゲーム時代のもやっとボールが、ようやく投げられた……。長かった……」

満足のため息をつく。恋人を得ることができなかったフィリップに、ざまあ！と言えなかったのが些か心残りだが、まあいい……。つか、オフィーリアのポジションが浚われた恋人になるのか。いや、でも救出依頼を発注するような奴はうちのギルメンにも居な……いた。

嘆息する。そういえば厄介な奴が一人いたわ。まさかとは思うが、あの坊ちゃん助けに来たりしてないよなあ……？

しかし、クエスト”フィリップの盗賊たち”の発生はとても分かり易い。なぜこんな所で浚う？！と疑問に思うような、人通りの多い山道でスタートする。まあそれでもなけりゃ救出依頼受注時に盗賊の隠れ家のマップくれたりはしないよなあ。嗚呼、かくも虚しい初心者用クエスト。

すっかり忘れていたが、俺には、いや、オフィーリアには恋人が居た。さらに恋人どころか、婚約もしていたらしい。らしい。心底どうでもいい。そして状況に流されたまま否定しなかったのも事実である。何故ならメリットがあつたからだ。それも俺の性癖を満た

す、素晴らしいメリットがあつた。

だがそれも今は昔。今は今で、モンスの代わりに盗賊を釣り上げ
ては独り、放蕩の限りを尽くしている。

こうして今のところ己の性癖を満たし人生を謳歌している俺だが、
この世界に來た当初は紛れもない衝撃と失望を味わった。

生活水準の低さに嘆き、科学の未発達っぷりに混乱した。魔法は
個人適性に制限された才能だ。マジックアイテムが存在したとて、
その便利さは誰でも使えるように調整された科学技術とは比べもの
にならない。

16世紀くらいの欧州を想像してみよう。貴族どもが王家を取り
巻いて、宮殿でおほほうふふと笑い暗躍し民衆を踏み敷いてる間、
商人はさらにそれを擦り潰し、残った一般人は貧困に仰ぎ、悲鳴を
上げて悶えているだけだ。

国家は、2つの国から構成されている。とはイギリスを表した弁
だが、まさにこの世界も同じだった。

例えるなら、圧倒的な金と権威で生活を謳歌するセレブリティが
居たとしても、小金を放出することで小規模なそれを模倣して、一
時のなんちゃってプチセレブ気分を万人が味わえた現代とは違う。

ここには血統主義により隔絶された身分差別が存在しているのだ。
金が有ろうが木っ端のいち平民に過ぎない人間には、模倣すること
すら許されず、罪として処分される場合もある。特権階級を真似し
境界線が曖昧になる行為は、選ばれた彼らの立場を揺るがす犯罪だ
と。

ぶっちゃけよう。不便だった。どんなに金が有ろうと、力が在ろう

と、有象無象に過ぎない冒険者の俺たちにとって、糞ほど不便な社会だった。

とは言え、それでも探せばそれなりに良いところが見つかる。

実に俺にとって得難いものがこの世界には存在してた。そしてそれは、俺の中にある深淵から隠されたものを引きずり出し、ある日臨界点を振り切らせたのだった。

——つまり、奴隷の存在と避妊魔法、そして性病がない、という事実だ。

全てのきつかけは奴隷市場からだった。

善人を気取るつもりはないので、最初に奴隷の存在を知った時から完全他人事だった。一緒に移転されて来たギルメン達がそれぞれ2人組で市場のあちこちをのんびりと見学しているのに対し、ペアのサブマスター、——サブマスあたりはひたすら何か喚いていたような記憶がある。その辺じつに臆気だ。まさにで？っていう。

そもそもゲーム時代から奴隷もそれを売買する人間も登場していたのに、今更なカルチャーショックを受けられてもこちらが困る。世界観的にも、構成された社会的にも居てもおかしくない存在だ。単に歴史的事実に沿って設定されただけのものだろう。

その人ごとだった奴隷になぜ注目したかと言うと、その場で興奮のあまりやたらと目立った件のサブマス——ちなみにサブマスはネカマだ——に、ガマ蛙によく似てるというか、ジャバ・ザ・ハットだ。ジャバ・ザ・ハットそっくりな商人が売り込みをかけたからだ。

そして憤慨のあまり固まるサブマスに、蛙ヅラの商人は16、7位の幼い少女を差出して言った。

「どうです？初物ではありませんが、若くて器量のよい娘だ。お客様は魔法も使えるようだし、妊娠の心配もなく長く楽しめますよ。勿論、そういうプレイが好きなら孕ませることも可能ですし、実にお買い得だと思います」

のっけから性奴隷を進めてくる商人は実にアレだが、冒険者なのでまま有る事態なのだそう。娼婦の方が安くつきそうだが、連れて歩ける上、いつでも処分できて便利なのが良いらしい。へえへえへえへえ！確かに納得。

しかし、そのまま聞き捨てるにはいけない言葉が聞こえたので、思わず俺は問い返した。

——つまり、妊娠って魔法で防げるもんなの？あと性病はどうすんのよ、と。

それに対する商人の答えは明確だった。

魔法さえかけておけば、任意の期間妊娠はしませんよ。これ一般常識。性病？回復魔法で直せるじゃないですか。そもそも性病持ちなんて滅多に居ませんよ。と。

——それこそ俺にとって、真のカルチャーショックだった。

衝撃に固まる俺の、マントから覗くオフィーリアの美貌に気付いたのだろう。商人は口元に下卑た笑みを浮かべ、舐めるようにオフエーリアを見た。

ゲームにおいて、PC、NPC共にポリゴンで構成されたただのAvatarだ。勿論VRゲームでAvatarが常に無表情ではあまりに

も不気味だ。その為、一応だが表情はある。といっても設定されたパーツの組み合わせでプレイヤーの感情を表現するだけなので、限りが存在する。もとより人間と比べる程もない。なにより娯楽として、あまり宜しくない類の表情は出来ない。組み合わせ自体禁止され存在しないからだ。

オフェーリアに対する商人の表情は、ゲーム時代、いや現実でも男の俺には決して正面から見ることにない表情だった。

「へえ……。これはこれは……」

——目は口ほどにものを言う。

ガマ蛙似の商人は、服の下を見透かすかのような粘着質な視線でオフェーリアの体を這いずりまわり、顔から滲み出た劣情を一切隠さなかった。流石の俺もたじろいだ。人生で経験することのない事態に直面したからだ。

目線に中てられた事を理解したのだらう、奴は増々オフェーリアを猥褻な目で見てきた。ニヤニヤと意味ありげにオフェーリアに笑いかけ、その肢体を手でまさぐるかのように何度もこれ見よがしに視線を動かした。縫い止められたかのように動けないオフェーリアに注視し、それでいて左手で商品の奴隷をわし掴んで引き寄せると今度はオフェーリアに注ぐ視線と同じ動きで見せつけるかの様に怯える奴隷を弄んだ。わざとらしく首筋を掠めるよう舌なめずりしては蹴るそれに、見られているだけで何かをなすり付けられて汚され、あぐく犯されている様な気分になった。

——この手の内でいいように慰みものされる奴隷とお前は同じだ。
そう言われた気がしたのだ。

ようやくこの事態に、今の今まで凍り付いていたサブマスが復帰した。

唐突に再起動したサブマスはもの凄いい殺気を放つと、剣を抜いて叫んだ。

「この女の敵がッ!」

——いやいやいや!そこはセーフモードで再起動しようよ!古典過ぎるだろう、いくらなんでもそれは。

とりあえず全力で止めた。異世界に着て早々、悶着は御免だ。何とかサブマスを宥めて市場を後にした時は、ギルメン全員心の底から安堵したものだ。なんつーか、サブマスのお守り心底面倒臭えわ……。

しかし、この時起こった出来事は忘れ難く、街で奴隷を見つける度思い出した。反芻していたと言ってもいい。

そうこうするうちに、元々ネカマでロールプレイやってただけあって適正があつたのだろう。澱の様に積もり積もったソレがある日突然ゲージを振り切り、そして爆発した。

——つまり、めでたく特殊性癖が花開いた訳である。

俺の人生、特殊性癖に捧げることとみたり。

ネカマ万歳!TS万歳!女性アバター万歳!ゆっくりノリスクで犯して鬨って陵辱していつてね!

以上、俺の歴史に新たなる1ページが刻まれた瞬間である。

——さて、首尾良く性癖を自覚したところで、実行するには色々問題がある。まずは肉体の耐久性能についてのお話だ。

こちらら可愛い可愛い獲物なのだ。

服を引き裂かれ、悲鳴すら上げられずか細く震え、凌辱されたのち悦楽に落ちるだけの簡単なお仕事とはいえ、アイテムや防具を身につけるわけにはいかない。興醒めである。

いや、いずれそういうプレイもいいけどね。今は基本を押さえない。

つまり、アイテム・装備万全の複数人に対し、ステータスとスキル頼みの全裸単独で挑むということになるのだが、これが戦闘だったら、実にマゾい。

——従って、検証には万全を期した。

装備を全てはずし、コマンド——よろしく匍匐で繁みや砂利の中を進んでみた。だがこの珠の肌には傷一つ付かなかった。水中や岩の下敷きになったり、崖から落つこちたり、毒沼や溶岩は駄目だった。つまり風景オブジェクトがかすった程度ではアバターはダメージを受けない、という法則らしかった。

粘膜はどうかと、火傷必至の食べ物を入れてみた。熱かったがそれだけだった。

念の為ナイフでそつと舌を傷つけてみた。レベル差補正が生きていた。一般的なナイフなら問題なし、多少傷付いたところでスキルの自動回復で即時に治った。

魔法やアイテムに関しては厄介だ。

ゲームとしての把握はしても、この世界独自のものがあつたら怖い。避妊魔法やら性病治癒魔法が既にナニソレ？である。攻撃魔法

はさて置いても、回復・呪術系魔法は把握しときたい。デバフ無効のスキルを付けても、解決しないのは恐ろしい。いや、ハブ系だって使い方次第だ。リヨナ的な意味で。

奴隷が存在する以上、洗脳・従属系の魔法とマジックアイテムが手軽かつ豊富に有るだろうことは想像に難く無く、どうしたもんかと悩んだ。結局ギルマスに頼んでオフィーリアに洗脳・従属魔法をかけてもらった。重ねがけが無効な魔法だからだ。俺、超必死。

とにかく思いつく限りのことを検証した。独りでは限界が見え、ギルメンにも意見を求めた。快く協力してくれた。行動原理を知るギルメンはそれまで基本干渉を貫いていたが、俺の性癖とこれは別の問題だ。異世界で異端である自分達が、予期せぬ拘束を受ける事態は避けたいし、その為の情報はどんなものでも知っておきたい。誰だって自分が一番かわいいのだ。

それでも依然恐ろしいのが、同じプレイヤーだった。

奴隷商人に転職したPCなんて最恐じゃね？なにせお互いの手の内を知り尽くしているわけだから。

結局、PCを見たら即逃げろ。魔法・アイテムに厳重注意。贈り物と不審物に手をつけるな。飲み食い禁止。ブランド公爵に遭遇しないよう気を付けること。

——そう結論づけたのだった。

どういうことって？つまり、俺はギルドからも晴れて、エロエロしてもいいんじゃない？でもSMは程々にね！ってお墨付きもらったってことだよ、言わせんな！

とはいえ、問題は依然として残る。肉体的なものでなく、心の問

題だ。

性癖を自覚したからと言って、ハイじゃあそこで一発やってみようか、などと気軽に出来るものではない。何せ未知の領域だし、想像と現実とは往々にして異なるからだ。

テンションが振り切れていた俺は、これが処女の心境か！と、かつて俺を焦らしまくった彼女の気持ちに、勝手にシンクロした。しかし恐怖と、俺への愛情を――性欲含む――天秤にかけて悩んだ彼女に対し、俺は他人の都合もへつたくれも無かった。

だって、よりによって三十路の半ばを過ぎた今、わざわざ女になって、しかも異世界で、あえて行う必要のない行為なのにも関わらず……！！

先生、それでもエロエロしたいです……！

阿呆もここに極めり。である。

ちなみにこの時、変態度的にはまだ入り口すら開けてない。だが、男の実情を腹の底から知っている分、阿呆だの馬鹿だのの次元は遙かに超えていたと思う。

実地が妄想と違うからと直前で「やっぱ怖いからやめ！」などと言っことも出来ない。いや、絶対にやりたくない。なにせ現実では言われる側の男だったのだから。それこそ身に滲みるほど実感できる。

「怖い」だと？優しくするって言ってんじやんよ。「やめて」だとう？！こっちはもう準備万端だつつの！！

ほんと止めて。悲しすぎる。我慢すぎて涙がこぼれちゃう……

俺の相”棒”からな！

上手いこと言いました。俺、超上手いこと言いました！おやぢギャグ乙ッ！

——とにかく、恐れる気持ちがあっても試したいのが人情だ。

はつきり言つて、自分するのは飽きた。いや、気持ちよいのは変わらないが、次のステップが存在していると解っているのに足踏みを続ける自分に飽きたのだ。少し勇気を出せば、そこに樂園が存在しているというのに……！

毎日歯咬みする。ああ、エロエロエロエロドロドロドロドロ又ロ又ロ……。

——こんな気持ち、リアル中学生の時以来よ！

あの頃の俺はサルだった。そして今の俺はメスザルだ。そういやPLAYBOYのアイコンが兎なのは、やたらと繁殖力が強いところからきているらしい。つまりお盛んってことさ！ならば今のオレは正しくバニーちゃん。

かわいいウサギちゃんは、貴方の熱くて堅い人参が食べたくて仕方ないの！そしてあたしを思う存分召し上がって……ッ！

覚醒直後、そう熱弁した俺の性春の主張にギルドメンバー、——ギルメンはもれなくドン引いた。

あの時の絶対零度の目つきは、マゾいと評判のクエストボスでラストアタックをスカった時以来だった。

みみみミスちゃうわ！呼吸を読んで盛り上げたんだよ。根を詰めすぎ！貴方達疲れているのよ！駄目。そんな目で見ないで！嗚呼……その目つき溜まらないわッ！もっとあたしを蔑んでちょうだいッ！！はあはあはあ……ッッ！！

——ギルドを追放させられそうになったので、以降、ギルメンの前でぶつちやけた話はしていない。

なんていうか当時は性欲が臨界点を突破するあまり、ちょっと頭がおかしくなっていたのだ。もちろん今も十分アレだが、まだマシだ。なにせ可笑しいことを十分自覚しているのだから。狂人は自分が狂っていることを認識しない。これが俺の持論だ。素晴らしいね！超理論！

1 : 異世界移転者の物語 下のうえ

盗賊たちのねぐらは廃鉱山の一角にある、狭い坑道のひとつだ。現実ならば迷路のように入り組んだ坑道が山を侵しているんだろ。うが、そこはゲームの設定らしく斜面に6個しかない坑道の内のひとつで、中も狭い。え？これだけ？と拍子抜けするぐらいだ。この辺の配慮は初心者用のお手軽クエストだからだろう。まああんなクリア条件ですし、御大層なダンジョン作られたところでトライしようとする奴自体が居なくなるわな。

場所自体は街——公国王都からほど遠いジユラ山脈の中間地点にある低い山だ。

公国王都を中心としたフィールドを山脈が囲っているのだが、イメージ的には視力検査の記号、あれの上に隙間が空いたものと同様に北側に狭い抜け道が存在している。そこを抜ければ次のフィールドだ。

ちなみに山脈自体を真っ直ぐ抜けて次のフィールドに行くことも可能だが、時間が掛かる。その上セーブできる最寄りの村が遙か遠い。また、初心者こと1stキャラの初期限界区域も兼ねていて、山脈の丁度中央付近でループする。抜けられると勘違いしてマップを見ずに進んでいくと、延々同じ場所を廻る羽目になるので注意しよう。初期限界区域とは言えアホ程広いので、要所を巡り旅し続けたとしても1stキャラカンストまで飽きることはない。寧ろ半分も行かずに終わるのではないだろうか？広すぎて旅の道中で自分以外のプレイヤーとすれ違わなかった、なんて事もよくある話だ。

公称で”フィールド”とされてしまっているのに狭いイメージを受けるが、フィールド1つが他の下手なオンラインRPGのマップと同等ぐらいある。今のところではMMORPGでダントツの広さ

だ。マジ正気じゃない。ただ現代のMMOの基本原則である”一つのサーバーにすべての人間がアクセスする”ことを考えると、運営の判断もまあ妥当なのかもしれない。誤算があるとすればMMORPGの人气が芳しくないことだろうか。現代の花形ジャンルはなんといってもMMOFPSだし。

えっちらおっちら歩いて坑道を出る。後ろを振り返ると、背の低い鉾山の遙か向こうにジュラ山脈が見えた。徹夜エロエロ明けの朝日が眩しい。かくも素晴らしき不健全。

ぼんやりした頭にも沁み入る山紫水明にしばし目を奪われるが、聞き覚えのあるような声が耳に入り我に返った。

「オフィーリア!!」

騎士団だ。その小隊を引き連れるように、先頭には金髪の男が馬を駆っている。

思わず踵を返すオフィーリアに、金髪の男が叫んだ。

「逃げないでください!オフィーリア!決して貴女を逃がしたりしない!」

ストーカー宣言キタツ!マジ本当に来やがったのかあの自称恋人の坊ちゃん。まさかとは思っていたが、そこまでテンプレキャラだったとは抜かったぜ、畜生!よくまあここまで追って来やがった。しかも見てたようにタイミング良いじゃないですか。胡散臭え。

遠目で見てもきらきらしい容姿が目を刺す。馬を操る男の恰好良さに思わず殺意が沸く。直視したら確実に悪化を招くだろう。――俺のSAN値のな!

馬から逃げ切れる距離でもなく、逃亡は素直に諦めた。無駄骨は

折りたくない。できるなら今すぐ逃げ出したい。が、あのイケメソ坊ちゃんのしつこさは不本意ながら実証済みなのだ。かったりいな、畜生ッ！

イケメソは手を振って引き連れた部下に合図をすると、俺の前で黒馬から颯爽と飛び降りた。そして感動の面持ちでオフィーリアを抱きしめる。

「ああ、オフィーリア！貴女が無事で本当に良かった！」

オフィーリアの華奢な体をかき抱き、髪に手を差し入れて撫でる。そして額と瞼に唇を落とした。

欧米かつ！そしてイケメンは汗かいてても全身フローラルか！廁で芳香剤代わりに突っ立ってるや！無条件でタヒね！！
頭の中を罵倒雑言が渦巻く。だって仕方がない。この坊ちゃんがイケメソなんだもの。目に悪そうな豪華な容姿にげっぷが出そうになるんだもの。なにより自称婚約者のストーカーなんだもの！

「貴女が屋敷を飛び出したと知ってから、ずっと探していました。冒険者とは言え、貴女は回復魔法しか使えない。だから貴女らしき人物が拐かされたと聞いて、本当に心配しましたよ」

やはり、”フィリップの盗賊たち”発生イベントとして目撃されていたらしい。ほんと面倒臭えな。しかし今の俺は清楚なオフィーリアなので、おくびに出さず適当な言い訳をした。つまり、浚われそうになっただけ、途中で親切な冒険者に助けられました。坑道では野営しただけで、盗賊は冒険者が退治してくれたからもう居ないよ！やったねイケメソ仕事が減ったよ！てな感じだ。

俺のどう考えても無理のある言い訳を頷きつつ聞いていた坊ちゃ

んは、話の途中にも関わらずいきなりオフィーリアの体をすくい上げ、自分の黒馬にさせる。あああ畜生やられた。

「今、部下達がこの近辺と坑道を搜索しています。安全が確認でき次第、街に戻りましょう」

これで隙を見て逃げることもできなくなった。この馬盗んで逃走するか？手綱を握られてはいるが、ナイフで切れば逃げれるだろうが……まあ駄目だろう。騎士の愛馬盗んだ日には牢屋にぶち込まれて強制奴隷ルートに突入してしまう。いや、それもちよつとやってみたいが、牢屋プレイとかもの凄くやってみたいがッ！でももう少し自由に遊びたいのよ、俺。だってまだまだ遊び足りないんだもの！結婚しない男の言い訳の如く考えながら、仕方なく馬上で辺りを観察する。

——この坊ちゃん仕事が嫌になるほど出来るらしい。本当にイケメソです。ありがとうございました！

とにかく、まきに巻いた俺を追って来れた事もそうだが、部下の采配も見事な感じだ。オフィーリアとの運命の再会シーンを繰り広げている間、部下達は周囲を警戒しながら搜索している上、森から新しい部隊が沸いて出てきた。事前配置してやがりましたか。マジ逃げる隙無えな。まんどくさ！

「愛しいオフィーリア、どうか許してください。私は貴女を大切に思うばかり、貴女の気持ちを蔑ろにしていた」

皮の手袋をはずして青鹿毛の馬に乗るオフィーリアの手をそつと取ると、イケメソ坊ちゃんは今剣な顔でそう謝罪した。

あ？いきなり何の話よ？ああ、屋敷を飛び出した原因か、すでにどうでもいいから忘れてたわ。つつか、あそこに軟禁したのはそもそもお前だし、今現在も逃げたい俺の気持ち完全に無視してるじゃ

ねーかよ、クソが！

「オフィリア、これから私は貴女だけを見ます。どうか永久とこしえに私と共に在ってください」

一歩間違えれば猟奇的な台詞をイケメンは告げた。怖いわ！ガチで！ちよつと頭を冷やして考え直してくれまいか？あと（男漁りに）旅に出たいし、坊ちゃん、お前とはもうおさらばだ！

と言う俺の希望をごく自然に聞き流して、部下の報告を受ける。
てめえ……。

「やはり貴女の言う通り、既にここに盗賊は居ないようです。さあ、共に帰りましょう」

俺の希望は無視かッ！無視なんだなッ！！反省したんじゃないかったのか？この野郎！！……って、ああ違った。謝ったから水に流せよ、な！ってことか。糞がッ！！

さあ、これからコイツを殴りに行こうか！と思った瞬間、オフィリアの後ろ——馬に奴は乗ってきた。すかさず腕をまわしてオフィリアの細い肢体を引き寄せる。腰骨をじわりと撫で上げて、耳を食みながら低い声で囁いた。

「覚悟してください。——2度と、逃げようだなんて思わないようにして差し上げましょう」

——つまりお仕置きプレイですね？！もちろんいいですともッ！！
縄とか道具とかもオプション追加していいのよ？一晩中ゆっくりお仕置きしていつてね！

天恵に目をかつ開き胸が高鳴る。めくるめくお仕置きプレイに想いを馳せ、結局俺はただ大人しく馬に揺られることにした。

そしてふと考える。その強引さは単に性格なのか、或いは立場的なものからくるのか、それとも。コイツ、ほんととはどっちなんだろ……？

坊ちゃんこと豪奢なイケメソは、ルーエン以下略（母親姓領地名王国的役職名父親性）、という長い名前の持ち主だ。

次期伯爵であるこいつは、実に端整な容姿の持ち主で、かつての俺なら出会い頭に親指を首元に掻き下ろし「リア充は地獄に堕ちろッ！」と叫んだくらいのルックスだ。よくぶん殴られたものだ。

そして以前、俺の処女を――アーツ！と失礼、オフィーリアの初めてを捧げた相手でもある。実にめくるめく素晴らしい体験だった。

こいつを選んだ理由はいくつかある。

まず何より、生理的嫌悪を感じないこと。容姿が良いこと。そして社会的評価があり、人々からの支持を受け、評判も良いこと。立场上女慣れしていて、後腐れなさそうな所。最悪、愛人にと迫られても気に入ったら受ければいいし、面倒臭いならキャラチェンジしてバツクれば良い。重要ポイントであるテクニクに関しては、娼館で確認した。いやあ、お貴族様となると、馴染みの高級娼婦の一人や二人居るもんですね！いい男には娼婦と言えどベタボレですか？そうですか。勝手に心を読んだとは言え、俺と比べられたわ。ほんと死ね。

いずれにせよ、思い出は美しいに越したことはない。厳選し選抜するのは当然だった。

あれ？これ自分を高めに見せたいクソ女の理論か？わお！でもオフーリアは客観的に見ても高根の花だから！こまけえことは気にすんな！まさに自分を棚に上げるッ！！

とにかく、そうしてオフィーリアは坊ちゃんに哀願し、そして無事叶えてもらった。

貴族とその他の有象無象など隔絶された存在だ。決して相入れない深くて広い溝がある。つまり名誉とか血筋だとか、何の腹の足しにもならないやつだ。誇りに至っては光の中で輝くだけで、有り難がつて降り積もらせ過ぎれば病むだけの毒に成り得る。

そんなお貴族様であるこの坊ちゃんと何故婚約者などという立場になったのか、実は未だに分からない。

無事性人の通過儀礼が済んだ後、さらに念を入れて2度ほど致した。それで、よし前哨戦は済んだ、今度は不特定多数との経験を積もう！と思った俺は娼館への身売りを試み、そしてこいつに止められた。

立派な黒馬を駆け、端正な顔は歪み息を乱して娼館へと売られる美女オフィーリアを助け出すその必至な姿は、物語ならば間違いなく盛り上がるだろう見せ場だ。

だが生憎とセルフ身売りを目論み、喜んで人狩りに身を任せていた俺には迷惑なだけだった。勿論、この人浚い達もばっちり調査済みだ。身売りが無理と分かった俺は、仕方なく、お断りします。A略ッ！という感じで撤退した。——だのに、それでも奴は追って来た。

おいしい！てめえ今までどんな美女でも追躡することなかっただろうがッ！知ってるぞ！女性遍歴余さず調べたんだからな！！

——結局、お貴族相手に無茶することができなかった俺は捕獲——保護され、憧れの娼館の代わりにこの坊ちゃんの家に住むことに

なつたのだつた。

家といつてもそこはお貴族様だ。屋敷だ。立派な館だ。その敷地内の別棟——結婚してない男女が同じ館に住むのは外聞が悪いらしい——に、俺は保護と言う名の軟禁を受けた。

「街周辺の人浚いを組織ごと戦滅しました。もうあの男たちはいません。どうか御安心ください」

水辺から上がったばかりの女神の如きオフィーリアの前に王子様よろしく膝を着き、白魚の手を取って奴は告げた。

ようやく顔を見せたと思ったら、俺に協力してくれたあの気のいいおっさん達に何してくれちゃってんの?!こいつ!!

ぶっちゃけ、当時そう俺に報告してきたこのボンボンの顔を、形が変わるまでぶん殴ったら気が晴れるかしらん?と思い詰めるほど、俺は欲求不満だった。

それまで毎日両手のお世話になって来たというのに、軟禁されて以来始終侍女やらメイドやらが側にいるこの屋敷で自家発電することが出来なかったのだ。やることと言ったら綺麗な絹のドレスを着て、侍女と茶あシバいてお上品に笑うだけ。ほんとストレス溜まるわぁ……。

あと俺は心の底から変態だけど、1人遊びの跡を発見されたオフイーリアが、プレイ以外で後ろ指さされるのは耐え難いと思ってるからね。念のため。

しかし照れた調子で奴が続けた言葉が、晴れない俺の境遇を180度変えた。

「それで、父に会ってもらいたいのです。色々処理も終わりましたし……貴女を父に紹介したい」

そうして紹介され、挨拶したこいつの父親は典型的なお貴族様であり――変態だった。

正に晴天の霹靂。どうしてこうなった？

父親に紹介など、いよいよ抜き足ならん状態じゃないか。いつそ屋敷から逃げ出そうか、いや、出来るならあの坊ちゃんを言葉で丸め込んで穩便に退出したい。しかしそれが駄目なら少々手荒な方法を使用するしかないな。

などと物騒な方向に思考が傾き始めた頃、件の父親に呼び出された。本館の方だ。呼び出された部屋に居たのは父親である現伯爵と、屋敷を取り仕切る寡黙な執事だけだった。

そもそも、坊ちゃんは日中お仕事で家に居ない。人浚いを戦滅するような騎士団の団長をやってる。ほんとお約束ですこと！

その坊ちゃんが不在の間の呼び出しだ。もしか、家を出て行けと言われるのか？それなら有り難い。今直ぐにでも出ていきます。はい！喜んで！そう思っていた俺の期待はあっさりと裏切られた。悪い方向に。

「どうやって誑かしたのかは知らんが、冒険者が息子の婚約者になるなど、家の恥だ。せめて形だけでも取り繕える様、行儀作法の訓練をしろ。解かったな」

さっぱり解らなかった。と言うか、この伯爵、市井の人間を蛇蝎の如く嫌ってなかったか？なのに何で婚約者？何故追い出さぬ？！

「訓練はセバスが直々に行く。反抗は許さん。黙って従え」

言い放った伯爵の言葉に、流石の俺もあっけにとられた。もつとも今の俺はオフィーリアなので、動揺して体を震わせ頼りのない儂い妖精のような風情だろう。

いやいや、俺もう出ていきますんで。寧ろ出て行かせてください！そう言いかけた俺——オフィーリアの細い腰を、執事が叩いた。うお？！何だビリッとした！鞭ですか？それ乗馬鞭ですか？！驚く俺に、執事は無表情で告げた。

「なにをしていらっしゃるのです。言うべきことがあるでしょう？」

お断りします。しか思いつかなかった。

何も言わないオフィーリアを見て取って執事はもう一度、今度は先ほどより少し下——いや、ぎりぎり尻か——を叩く。

「はい、解りました旦那様。そう答えるのです」

動揺に脳内を吹き乱らした俺ことオフィーリアに、もう一度鞭を浴びせる。もう完全に尻だ。お尻叩いてますね、貴方。

「どうしました。早く言いなさい」

言うしかなかった。

というか、この後どんな展開になるだろうか、たじろぐオフィーリアの振りで内心大変な期待をかましていた。

「よろしい。これから何か言われたら、直ぐにそう答えなさい」

頷くオフィーリアに再び鞭が飛ぶ。 ああん！いいわあ……。

「返事はどうしました？」

再び、無表情の執事が震えるオフィーリアに告げる。 けぶる睫を涙で濡らし、か細い声で返答するオフィーリアを伯爵は粘ついた視線で観察していた。 そうして訓練という名のセクハラ——調教が始まったのだった。

オフィーリアの制作コンセプトは、儂げな美女だ。 触れるのを躊躇うような、嫋やかな雰囲気醸し出す女神の如き美貌、溢れんばかりの清楚さ。 柔らかい言葉遣いに、控えめに周囲を立てる品のある所作。 見る者から最大限の庇護欲を煽る、そんな存在。

だがそれは、ある種の性的倒錯を持つ者から抑えきれないほどの嗜好を引き出す。

ゲームの中は、一種閉鎖されたコミュニティだ。 下手なことをすれば即日ネットに動画が上がり、晒される。 公式・非公式の掲示板でズラリと並んだ要注意リスト入りし、本人の意志とは裏腹に、笑い者され嫌悪され村八分を受ける。 最悪垢停止、もしくはBANが待っている。 だがそうなるのだと解っていても、馬鹿な行為を辞められない人間はどこにでも居る。

——中の人が男と公言してなお、ロールプレイだと宣言してそれでも、オフィーリアは信奉者と、変態ホイホイとして有名だった。

暇を持て余した貴族達は、娯楽として性的技術を高めた——そうして倒錯した性行為が発達した。

なんて歴史書に書いてあるわけではないが、まあそんな感じだろうと勝手に妄想している。魔女狩りの拷問だって、お前よくもまあそんなの考えましたね、って代物だ。うっかり暇に飽かせて嗜虐の情熱を突き詰めたら出来ちゃいました、そんな結果だろうと思うわけですよ。

そして今、オフィーリアは”暇を持て余したお貴族方の遊び”を、思う存分味わっている。

最初はまともなマナーの訓練だった。ひたすら難癖を付けられ、罰という名の性的なお仕置きがあるのを除けば。

身を飾るだけの繊細な紗のドレスの上から、思う存分体を玩弄され、少しでも抵抗——ぶっちゃけ反応してたんです、ええ——すれば、さらに追加で言葉と鞭とその両手で巧みに嬲られる。何日にも渡り少しずつ過剰に、そして過激になっていく調教を散々繰り返し返され、じつくりたっぷりねっとり教え込まれた。

執事から与えられる些細な刺激にすら否応なく反応する様になった頃、オフィーリアは地下室に連れ込まれた。

——マニア系アダルトビデオ、エロゲ、エロマンガでしか見たことのない道具の数々が其処にあった。

過激つてもんじゃねーぞ！初心者なんですから！散々、初くて何をされてるのか解りません。困惑してます！って演技してただろうがッ！

内心どころかりアルに泣きそうになっていた俺に、オフィーリアに、執事は告げた。

「貴女がルーエン様に相応しいか検査致します」

登場したのは伯爵と第3の男。伯爵お抱えの、やっぱリドが付く変態な医者だった。

伯爵は相も変わらず爬虫類の様な目つきで舐める様にオフィリアを視姦し、医者は怯えるオフィリアに簡素なベッドの上に寝るよう、冷たく命令した。

医者が検査という名目がある以上従わざる負えない。こわごとと身を横たえたオフィリアの手足を、医者と執事が手早く拘束する。そして医療用だろうナイフを取り出した。

はいっ?!つか、この世界回復魔法あるじゃん!ナイフいらないじゃん!せめて取り繕えよ!医者エツ!!

幸い拘束具は力で壊すことができる。地下室の入り口も破壊できるだろう。いざとなったらギルメンにメッセーじ飛ばして助けてもらおう!そうしよう、俺!情けねえな!俺ッ!

すわ、スプラッタカリヨナか?!と怯える俺に、だが引き裂かれたのは服だった。――ですよねえ……。

そんなわけで、泣いて哀願し、怯えわななくオフィリアのドレスを少しずつ裂いては、それ単なる筆だろう!とか、何その海産生物?!とか、アレでコレなあらゆる道具を使用し、これはあくまで医療行為だと宣言した変態3人がかりで思う存分肢体をまさぐられ、鬦り、弄び、焦らし、そして開発されていったのだった。

何というか――ねっとりじっくり観察される様に慰み物にされるのは、たまらなく好かったです。むしろ清楚なオフィリアのイメージが崩れないよう演技するのが大変でした。ごつつあんです。ああ、明日も楽しみだわあ……!

それ以降は別棟でも、すぐ部屋の外に侍女を待機させての”朝の

体調検査と言う名のアレ”とか、本邸での”マナー訓練と称したコレ”とか、坊ちゃんが帰宅するぎりぎりまでやり続ける”旦那様へのご報告と成果発表であるソレ”が行われた。もう最高！

一応、訓練と取り繕った手前もあるのか、あるいは世間的な貞淑に合わせたのか最後まですることはなかった。どんなに際どくても、例えば夜の営みの指導と称した奉仕行為も、目隠しをして布越し——お互い着なくても変わらないほどの薄布だが——でさせていた。まあびっくり！してもいいのよ？っていうか、微妙にモノが足りないんだよ！いろんな隙間が埋まらなくて不足してるんだよ！とつととヤルことやってくれやッ！

その頃坊ちゃんは何んと、婚約者などと世間的な名称が着いてこの方、オフィーリアに手を出さなくなっていたのだ。いや、そこはしろよ。どうせ避妊魔法あるんだしさ！大手を振ってしようよ！ねえん貴方あ今夜どお……？つか、娼館行ってんじゃねえよッ！！寧ろ俺が金払うからしようよ！それとももうあたしに飽きたの？釣った魚に餌はやらないの？！この浮気者ッ！……え？君を大事にしたい？

——足元を省みないクソバカ野郎に用はねえ。

俺はとうとう屋敷を飛び出した。さらなる天国、めくるめく多人数プレイを目指し、俺に遅くも熱いモノをくれるだろう、無法者の生息する地へ旅立ったのだった。

そして冒頭にもどる。

1：異世界移転者の物語 下のした

お仕置きプレイ大好きよ！寧ろ任せろッ！散々お前の親父たちにされたしな！！

——とか思ってたが、ちょっと待て。一寸おちけつ！

馬上で抱擁したオフィーリアごと自分のローブで包むのは、まあいい。馬を走らせると風が寒いし、今のオフィーリアが獲物モードで旅装束も軽装の極みを地で行く恰好だからだ。

ブラウスと帽子のついたケープのパンツルックで、靴は脛までのブーツ。普段なら腰にはウエストポーチ、背中には質素なシヨルダリーユック……ただし今は別の馬に括り付けられているが。装飾品らしき物と言えば、髪を結いあげる組紐と魔力効果増幅の為の指輪が一つだけ。

ゲーム時代から華美な恰好は避けてきたが、今この異世界では人目のない処に行くときは殊更気を付けている。釣り上げるのは狙った犯罪者だけでいいからだ。不用意に目立って、優柔不断なだけの一般人を暗黒面に堕としたくはない。誰にでも魔が差すことはあるが、俺は、それを好んで谷底に蹴り落すような趣味はない。

——趣味はないが、この坊ちゃんなら谷底どこか今すぐ馬から蹴り落としたい。

今宵はお仕置きプレイでレッツウェルカモンっ！とか思ってたが、まさか今からだとは思わなかった。

ローブで隠れているのをいいことに、現在よりによって馬上でプレイ開始ですよ。抜かったわ。まさかの乗馬プレイ。こんなエロ・シチュエーション見たこと無いよ？！どこのエロゲーだよ？！ちょっと俺に監修させるよ！安全性の意味で！！

そしてポジショニング的には、距離を取ってはいるが部下達が坊

ちゃんを取り囲みながら街へと帰還している、いわゆるひとつの嬉し恥ずかし羞恥プレイ、でありますよ。難易度高えな、馬術的な意味で！

最初は、如何にオフィーリアを探し出したかを。次に、どれだけオフィーリアに会いたかったかを。さらに、会えない間どれほどオフィーリアを想っていたとか、オフィーリアとの思い出を大切にしていたとか、オフィーリアのことを考えたとかとかとか。もうリア充あっちいつて死ね！的な事を延々語られた。

正直、俺はネカマでロールプレイヤーの変態であつて、男との恋愛なぞ興味がない。寧ろ御免だ。だから語られるお前の愛のメモリ——なんぞ馬耳東風なんだよ！馬の上だけにな！H A H A H A H A H A！とにかく野郎とイチャイチャする気はねえ！エロ！エロエロだけを寄越しやがれ！——と言う俺の魂の叫びを聞き届けたのか、プレイは始まった。

最初からオフィーリアの耳を思惑があつてはみはみしてたのは理解してたし、耳に息吹きこんでエロく囁いたり、首筋に口付たり、話しながらなんとなく腰やらお腹やらを撫でてるのは気付いてました——あれ結構色々されてね？——でしたが、しかし。

ゆつくりと体を撫でる奴の指先が、腹部をなすりように上がる。胸を押し上げるような位置で、ブラウスの合わせ目を掻き分けて指先が入り込んできた。素肌に触れると、柔らかな膨らみの僅かに下を焦らすように何度も指の腹で辿る。動揺するオフィーリアの耳の裏を舐めて、そうして嘲った。

——って、ちょ！手綱は？！スプラッタ的な意味では余興や遊びで命や体を張ったりできるもんか！のんびりとしたスピードだけど、うっかり落ちて首の骨折したら人生オワタ式だっつーの！

焦って顔を見ると、例によってきらきらしい笑顔で微笑まれた。

ただし、目が完全に獲物を顰る補食者の眼差しだったが……。

「どうしました？」

先生！大変！手綱はどこなの？！操馬してない！

必至なオフィーリアにやはり笑って答える。

「大丈夫、ちゃんと左手に手綱を持っていますから」

持ってますから、のところでオフィーリアの腰骨を指で挟むようにまさぐると背中に電流が走り、全身粟立つ。

なるほど、確かに今は太股の付け根の内側に手綱を押しつけつつ撫でてる感触がします——じゃなくて、色んな意味で馴れてんなコイツ。プロか？乗馬プレイの玄人なのか？！

「心配なら貴女も一緒に手綱を握ってください」

鞍を掴んでいたオフィーリアの手に手綱を握らせ、代わりにその両手首を纏めて捕える。

「——あとは、安心して身体を委ねてくださいね」

その体、多分俺が思ってるのと文字違うよね！異世界語が日本語変換されてるけどニュアンスがエロい方の肢体だよね？！安心できるかこのボケステッ！

「ああ、あまり身動きするとローブが肌蹴ますから。気を付けて」

わざわざ忠告すると、挿し込んでいた指で焦らす様に撫で上げながら、一つずつゆっくりとブラウスのボタンを外した。

——そのあとはもう無茶苦茶だった。

もともとオフィリアの体は、ほんのつい先程まで盗賊たち総出で苛まれていた。ゲーム的な体力値が回復しても、限界まで過敏になった触覚器官が完全に落ち着いたわけではない。”ストックされてもステータスは保存されたままの法則”である。それをこの玄人は、知らないただろうとはいえ、自分の部下に囲ませて羞恥プレイに乗せて追い詰めてきた。

そうして、奴は普段よりも過剰に応じる体を持て余したオフィリアを嬲り続けながら、俯いて恥かしさに首筋まで赤く染めるのを嗤い、唇を噛み締め堪えるさまに囁いて挑発した。

ちよつと待て。ほんと待て！なんなんだこのプロフェッショナルはッ！はい負けた！はい、俺今負けましたッ！……だからちよつと待て！

抵抗することも制止させることも、もうどうすることも出来ずにただ耐えるオフィリアを、それでも延々とロープの下で撫でまわし、揉みしだき、摘まみ、こね上げては反応させる。拳句、鞍とオフィリアの間に指を差し込んで、服の上から当てては擦り、挟んでは弄り倒した。そうして帰還中ずっと、震え悶えてすすり泣くオフィリアを、この達人は思う存分に蹂躪したのだった。

結局散々いいようにされて、ワープゲートを経由しつつ街に着いた2時間後は既に歩く体力どころか、馬から降りるだけの気力すらなかった。

結論、坊ちゃん舐めてました。飽きずに延々とよくやるよ！若えな、畜生！そして俺は耳年増的な単なる初心者でした！やっぱ実地は想像と違いー。！ハードすぎる。俺この域まではまだ到達できないわ。

え？ヌルい？いやだつてさ、生殺しだぜ。寸止め2時間コース。俺に死ねと？正直アホかとバナナかと。むしろイイから馬から降りて、今すぐお前のバナナくれよと！そんな感じですよ、マジで……。流石に懲りた。昨日も徹夜で頑張ったし、当分お腹いっぱい。今日はもう寝ようよ。俺、もう休んでもいいよね……？

馬を降ろされ横抱きに抱えられて尚、悪戯され続ける。口も利けず力の入らない身を預けたオフィリアを抱き上げて、自室のベッドへと運んだ。疲労と自身の熱で潤んだ瞳を向けるオフィリアに微笑むと、静かに宣告した。

「さて、逃げたお仕置きを始めましょうか」

——ですよねえーッッ……！！

そして俺は死んだ。スイーツ（笑）

いわゆる感覚の頂点グラフが存在するなら、男のそれは急速に駆け上がった天井から急速に落下し、地を這いながら終わる。俗称賢者モードへの移行だ。一方女性はというと、頂点のち多少は下降するが、そのまましばし高度を維持して、あとは緩やかに落ちるのだそうだ。その上、その頂点は男のそれより遙か高みにあるとされる。また同姓愛者の女性友人曰く、体力が尽きなければグラフ線を一定以下に下降させることなく続けることが可能なんだそうだ。

けしからん！なんて羨ましい！！

当時その話を聞かされた俺は——ようはノロケとテクニック自慢だった訳だが——俺は血の涙が出そうになるほど嫉妬した。男がクソ程面倒臭い手順を踏んで、ようやく束の間の到達を許される領域に、こいつと来たらずつと居続けられるなんて……！

泣いた。男泣きした。そんなかつて世界の思い出がある。

——だがしかし、異世界に来た今の俺は希代の美女オフィーリアだ。

本来決して訪れることの出来ない、前人未踏の領域に訪れることが出来るのだ。これに挑戦せずに何が異世界だ、ナニが男だ！！HENTAIの神様見ていてください。俺は未知の領域に今、足を踏み入れます……！

そうして俺は願いを叶え、より更なる高みを目指し、そして——後悔していた。

——体力が続けば。と言う注釈、完全に忘れてたわ……。

この場合の体力値は、ゲージで表されるものではない。ステータスとして数値に表れず、しかし同じように存在しているもの。人間として当たり前前に在るもの。

走り続けて体力が尽きたら、回復アイテムを使用すればいい。けれどいつかは歩くことすらできなくなる。その時必要なのは、睡眠と休息。ただ人として当たり前前の休みを取るしかないのだ。

つまり未だに、”ストックされてもステータスは保存されたままの法則”にオフィーリアは苛まれていた。

——お前普段の王子様然とした仮面どこやった？！

変貌激しい坊ちゃんに、オフィーリアはあの後2日ほど完全に寝台に縫い止められた。

若さつてすげえわ。から、アレ？こいつの体力値ってどうなってるの？てか、ステータスNPCとしておかしくない？ねえおかしくない？！もうお前のこと眉タンヒーローって呼んでいい？少女系ヒーロー絶倫パねえッ！！つか、流石はあの伯爵の息子だけのことはありますなッ！——まで、俺の思考が変化した。

正直、運営が18禁的な隠しスキルのパッチを隠密に導入したかとおもったほどだ。VRゲームで一番売れるジャンル、エロだし。

そして2日経って、ようやく日常に戻ったオフィーリアを待っていたのは、例の伯爵下略、変態トリオだった。

朝は医者が、その後から昼過ぎまでは執事が、夕方は伯爵が。以前の通りの過密スケジュールでオフィーリアを”教育”すると、夜には坊ちゃんが待っていた。

我慢して我慢して、1週間経って、そして俺はキレた。

もうね、無理！無理無理無理ッ！こちらら毒呪い混乱恐怖各種多重デバフくらったまま回復魔法かけられて、それでもクエストボス

との戦闘強制されてる状態だっつーの！！マジあり得ない。効率悪すぎんぞ！

オフィーリアは坊ちゃんに泣きついて現状の改善を訴えた。変態トリオには何を言っても無駄だったのだ。あとは坊ちゃんをどうにかするしかない。とうとう前回とは真逆の頼み——たまには娼館行つてこい！と、大変不本意ながら頼んだのだった……。

「オフィーリア。もう私は貴女しか見ないと言つたでしょう？」

だから駄目です。と、困った顔で、それでもオフィーリアを抱き寄せ撫でながら言つた。

そう言う問題じゃねえ！もう体力持たないんだつて。辛いんだつて。気持ちはイイけどな！

せめてお前だけなら何とかなるけど、4人は無理！だつてお前の親父どもが……。

言いかけたオフィーリアの唇にそつと指を当てると、坊ちゃんは微笑んだ。

「ああ、そうそう。日中は淑女の為の訓練を受けているのでしたね。ではそれを1日置きに午後だけの日を貰えるよう、父に伝えましょう」

——ああやはり、こいつもこちら側か。

頭の奥にあつた疑問が解消される。

親子だけあって同類か。流石だ。それで何をされているかも了承済みだと。道理であれだけ手を出しながら、最後まででは至らないと思ったが。成る程ね。坊ちゃんがそれを許さなかったのか、あるいは……。は――……。

オフィーリアが自分から堕ちるのを待っていたか。

笑い宥める目の奥に、じっとオフィーリアを観察する冷えた色が見える。しかし、それに気付かないかのようにオフィーリアもただはにかんで、そして礼を述べた。

無言で机に伏して眠る男たちに背を向ける。

扉を開けると、大部屋に作った食堂からの喧噪が聞こえた。今日も客が大入りだ。異世界用にアレンジしただけあって、かつての世界の料理はこちらでも好評らしい。

個室の扉を閉めて、ロックする。念のためだ。

2階への階段を登る。上へ行くための階段からはギルメント、あちらの世界からの友人達、つまりプレイヤーしか入ることはできない。そもそも入室権限がないので、それ以外の人間は階段すら見ることが出来ないのだ。

2階の扉を開けると丁度ギルマスが席を立とうとしていた。

「やあレディ^{オイ}、久しぶり。元気そうで何よりだ」

「ああ、無事に生きてるよ」

思わず苦笑して答える。

2階は宴会用の大部屋だけだ。中央に丸い大きなテーブルが3つある。部屋の隅にアイテムボックスが設置されていて、ゲーム時代ではここでセーブできた。

座り直したギルマスと同じテーブルに着いていたギルメンの狂戦士にも挨拶すると、その向かいに座る。置かれていたグラスを勝手に取り、酒を注ぐ。

「首尾良く行ってる？」

グラスに入った酒を啜りながら狂戦士が聞いてきた。もちろん俺の特殊性癖に関してのことだ。

ギルメン達は狩りに行く時と就寝する前に、必ずメンバー全員にメッセージを送ることを義務づけられた。何かあった時対処出来るようにするためだ。

もちろん俺も日々メッセージはギルメン全員に送っている。ただ状況を詳細に報告しているわけではないので、現状どうなっているのかはお互いに解らないのだ。まあ、細かく報告されてもウザいだけだと思うが。

ただし、それなりの頻度でギルマスにだけは別途連絡を入れている。オフィーリアにはギルマスの魔法が必要だからだ。

「順調に趣味を満喫してるようだけど、どうなのかな？」

「鉄の指輪をはめたところ。まあ満喫はしてるな」

無論、本当に鉄の指輪をしているわけではない。ギルマスの言葉を受けた単なる比喻だ。今でもってなお、オフィーリアは魔力増幅用の白金の指輪しか付けてはいない。

「ただ絶賛軟禁中でね、ここに来るのも護衛付きだ」

「護衛？」

笑って聞いてきたギルマスは、護衛という部分に反応して片眉を上げる。狂戦士もいかつい顔をしかめた。

「酒が不味くなりそうな話題？」

「いや？今は下の個室でいい夢見てる。店の場所ごと忘れてくれると便利なんだがな」

「流石にそれは難しいだろうが……仕方ないな」

1階の奥にある個室には、夢見草というスリープ状態を誘発するアイテムが、花瓶に活けた花に混じっていた。そうしてくれと、この食堂を経営するギルメンに俺がメッセージで頼んだからだ。おかげでスリープ耐性のスキルがなかった護衛2人は眠っている。

万が一夢見草で眠らなかつたら、また別のアイテムを使う手はずだった。もっとも多少エグいことになるので避けたくはあったが……。

「護衛付きって、何したのアンタ」

「愛されちゃってんのよ、俺」

おどけて答える。いや、事実そうなのかもしれない。再び逃げられるのを恐れたのか、単に独占欲が激しいのか……はたまたそう言うプレイなのか。

以前一緒に冒険していた仲間に会いに行きたい。そう懇願したオフィーリアに、坊ちゃんは難色を示した。だが結局は折れて、条件付きで外出を許した。いわく、必ず護衛と一緒に行動すること。夜までには帰ってくることに。

——貴女を愛しているから。美しい貴女が危険な目に遭わないように。

そう散々オフィリアに、もといオフィリアの体に言い聞かせたのだった。

おかげで今日も体がダルい。正直歩くのがやっとだ。

「——美しさって罪なのね」

「アホだ。アンタほんとアホだわ。この変態」

「そんな事実、改めて言われましても」

両手を可愛らしく自分の胸に置いて、小首を傾げて答える。吐くような仕草で狂戦士が唸る。

ほんと失敬な。俺は自覚のある正しい変態です。

ギルメンの前ではオフエリアとして演技はしない。したところで中身が単なるおっさんなのを知られている——かつて開催したオフ会で面識がある——ので、非常にぞんざいな扱いを受ける。また場合によっては話が進まなくなるので、効率が悪過ぎるのだ。そんな訳でロールプレイを慣行するのは、狩りの最中や衆目がある場所のみだ。

軽口を叩き合う俺と狂戦士のやり取りを、穏やかな笑みを浮かべてギルマスが見ているのに気付く。俺も2人に聞いた。

「そっちは？」

「こっちも順調かな？最近ではギルマスと一緒に狩りに行ったりもする」

「ソロの検証終わったし、また連携を一通り試したくてね」

ギルマスはこちらにきた当初、別でログインして移転に巻き込ま

れた身内の面倒を見ていた。その為、ギルドホームも不在がちで、こちらでの戦闘経験もあまりなかった。そのせいなのか、最近はやたらと狩りに出かけているらしい。

狂戦士の方も、こちらに来てから俺とは別種の特種嗜好が開花したらしく、そちらに精を出しているらしい。残念なことに俺とはある意味真逆な趣味なので、語り合うことが出来ずにいる。ほんと残念だ。

「ま、二人とも気を付けて頑張ってくれや。特に変質者、お前は注意しとけよ」

「人のこと言えないんじゃないの？」

失礼な！俺は目撃者ごと余さず綺麗に処理してるわ！

「あのねえ、俺は正当防衛の言い訳が出来るの。可愛くて可哀想な被害者なの。物騒な殺人衝動なんて無いのよ？」

狂戦士はとても人に同情を寄せられるような容姿ではない。ごつい筋肉がかるうじてチャームポイントになるかもなマッチョマン。強面の狂戦士だ。

狂戦士は鼻を鳴らすと、居丈高に言い放つ。

「最近は賞金首だけですうつ！腐るほどあるクエスト関連のNPとか片っ端から潰してるの！」

「それなら良いけどね。前みたいに一般人の場合は十分気を付けて欲しい」

「あゝ……」

すみません。もうしないんで。

ギルマスにまで言われて、ようやく決まり悪げに目を逸らすと、

口の中で呟くように謝ってきた。その狂戦士の様子にギルマスと二人、視線を交わして苦笑する。

意外にお子さまだな、コイツ。いい年こいてまあ……。

「しかし、クエストNPCが居なくなるってことは、この世界のその手の犯罪も少なくなるのかな？」

「ん〜……。その、面白くてですね、また増えるんですよ、NPC」

「増えるって？補充されるってことか？」

「そ、時間かかる奴も居るけどね。また似た様な奴が同じポジションに着いて、クエストNPCとしてせっせと犯罪を犯してた」

狂戦士の言葉を受けて、難しい顔でギルマスが考え込む。

「ステータスやレベルの変化は？」

「……体感ですが、多少上下の変化はあるみたいです。だけど戦闘の仕方が変わるような、大幅な変更はされたことないですね」

「それは是非、検証したいね」

俺はただ酒を飲んだ。ここが”Annals of Netzach baroque”と言う名の異世界ならば、構築された世界が崩壊しないよう、多少の補正がかかるのは必然といえる。

「お前が狙うの、高ステータスNPCだろ？クエスト重要度のクソ高いやつ。スキル解放様に必要な」

「それが？」

訝しげな目で俺を見る狂戦士に、俺は両腕を広げ笑って答えた。

「ようこそ”Annals of Netzach baroque”

ue”の世界へ！」

一瞬いかつい顔が惚けて間抜け面になる。ひでえ顔。

「あ？」

「だからココはゲームの中なんだよ。世界観設定と言う名の歴史と、システムではなく物理法則となった世界」

「文字通り、人の創りし世界か」

極めて穏やかに——あるいは冷静に自分を律しているのか——柔らかい口調でギルマスが言った。酔いではなく、怒りに顔を赤らめて狂戦士が吼える。

「何でこんな世界あんだよッ?!」

「さあ?詮無いこと、考えるだけ無駄さ。確かめようがない」

苦笑しただけのギルマスとは対照的に、狂戦士は頭を抱えて唸り続ける。

「最悪だ……」

はて?こいつ実に生き生きと楽しんでるみたいだったが、不満だったのだろうか?この異世界が。

「あれ?楽しんでんじゃないの?異世界と殺人を、さ」

「それはそれ。帰りたいことは帰りたい。と言うか、行き来したいの!」

「今まで通り、ゲームと現実として?」

「異世界とかつての世界を!」

それは贅沢な悩みだなあ。

思わずギルマスと顔を見合わせて苦笑し合う。

異世界移転するよりも、遙かに難しそうだ。出来るとしたら人外の範疇になるだろう。

俺はわざとらしく十字を切ると言った。

「それはアレだ。神様にでも祈るしかないねえ」

「神がいるならば」

冷静にギルマスが返す。狂戦士は今度こそ絶叫した。

「――設定で！神々が！去った後！！ってあるじゃないですかッ
！……」

「じゃあ居ないねえ」

「そうだね」

今にも憤死しそうな勢いで机を叩く。乗っていたグラスや酒瓶が倒れそうになり、慌ててギルマスと2人で持ち上げた。

「ほんと死ね！全部死ねッ！！」

「パンピー殺さんというてね」

「頼むよ」

そう言って退避させたグラスを置くとギルマスは席を立つ。去り際に俺に向かって微笑みながら言う。

「梟の仮面は付けないでくれよ」

あんまりなギルマスのセリフに、俺は笑って手を振った。

「もちろん。御免だね」

背中を向けて立ち去るギルマスを見ながら、俺はグラスの酒を飲み干す。

——けれど。

あの坊ちゃんを思い出す。

独占欲が強そうな割に、他の男の参戦を許している。それ以外の第4、第5の人間が現れられるのもそう遠くないだろう。なにせオフィーリアは婚約者で、近々社交の場で披露される為に”淑女の訓練”を受けているのだ。どんな社交の場なのかはお察したが。

俺は狂戦士のような殺人衝動は一切無い。とは言え、オイタの跡を消すのは必須だ。ギルマスとの約束でもある。

さて、伯爵家が、あるいは同じ趣味の他の貴族のいくつかが丸ごと消え去ったとして、この世界の補正はどう作用するのか。

——それはそれで、検証する時が来るのを俺はとても楽しみにしている。

「ゲームの攻略に検証は付き物だからな……」

異世界転移の謎を終え！

クエスト名を付けるならそんなものか。あの日、この異世界に来た時から、このクエストは始まっていた。そして4ヶ月経った今でも続いている。決して解決されることのないだろうクエスト。

やけ酒をひたすら飲む狂戦士にかまう事なく、俺も自分のグラス

に酒を注いだ。

外から賑やかな声が聞こえる。ギルメンが来たのだろう。階段を登り段々と声が近づいて来た。あの声は特効隊の2人組こと、お祭りコンビか。

「だからあ！アレは俺が食べたい芋餅じゃないのッ！」

「でもどうみても芋餅じゃん」

「俺が食べたいのは、外側に甘い衣が付いていて揚げてある——」

お馴染みのやり取りが聞こえて、俺はただおかしくて笑う。昔からあの2人はあんな感じのままだ。そう言えば、オフ会でも居酒屋の芋餅に文句を付けていたっけ。

「まだ喰えてないのか？理想の芋餅」

扉を開けて顔を覗かせた2人が驚いたように俺を見て、そして破顔した。

ゲームは面白い。のめり込んで自分飾り、あるいは曝け出し、時には真面目に、あるいは馬鹿をやる。友人が出来て、仲間が居て、恋人や結婚相手すら出来る。そしてこの世界が最高だと、この世界が全てだと。そう俺たち廃人は思い続けるのだ。

けれど。夢は醒めるから反芻できるのだ。あの夢は楽しかったと。そしてゲームは、いずれ終わりが来ると解っているからこそ離れ難いのだ。

——終わらない夢は、ただの現実なのだから。

そうして俺は楽しい異世界の為に、
オフィーリアであり続ける。

幕間：移転者は異世界で笑う

「違うんだよう！ 俺の喰いたい芋餅はコレジャナイロボ！」

「さつぱりわかんねえよ。せつかくメグさんが作ってくれたのに、文句言うな」

眉を寄せた眼鏡の男が顔を顰めて、喚くティーザラスを諫める。指をさして拒否されたのは、食欲をそそる焦げ目の付いた薄く丸い餅に、醤油の味を再現した甘いとろみのあるあんがかかった正真正銘の芋餅だ。——少なくとも、眼鏡の男、ハンドルネーム”ゼロス”はそう認識している。

その隣で困ったような、微笑ましいものを見る様な表情をした女性、ハンドルネーム”メグ”が呟いた。

「うーん、甘い衣が付いてるのね？ でもねえ……ベーキングパウダーが無いのよねえ」

「天然酵母とかって駄目なの？ 異世界ラノベの定番じゃん」

ほむほむらぶは隣でひたすら騒ぐティーザラスなどどこ吹く風で、指さされた芋餅に腕を伸ばすと自分のフォークを刺し、食べた。

「発酵酵母はね、酸味が強くて向いてないの。パンも酸味がきついでしょ？ 一応、重曹らしきものもあるけど、扱いが難しくて……」

「重曹だめなんですか？」

これ旨いになあ。そう感想を述べながら、同じくティーザラス

を無視した狂戦士”バルサ”も聞く。

「ホットケーキミックスみたいな軽い触感なんだろう？ 重曹でもいいんだが、こっちは精製されてないせいか苦味が強過ぎてな、どうにもな」

「レモンやビネガーとハチミツを大量に混ぜ込める、バウンドケーキみたいなならいいのよ。でもねえ、食感が重いから。特にスポンジ系に使うには難しいのよねえ。小麦の挽き具合も違うし」

「へえ、異世界でお菓子作りとか、物語の定番なのに」

「そう言える異世界なら良かったんだけどねえ。水質が変わるだけで分量の調節が必要になる分野なの。それなのにこうも異世界的な食材となると、ね」

こちらで現実の食事を再現しようとしても、そこには必ず世界が異なるという壁がある。ゼロスは食堂を始めるにあたってまず、自分の記憶にある食材とのすり合わせに苦労した。

似た味の食材、らしい調味料。しかしそれはそのもの——決して全く同じものではなかった。さらには探すこと自体を、次は調理の仕方を、そして組み合わせた時の味が同じかどうかすら一つ一つ確かめるしかなかった。

かつてはVRゲームでしかなかった”Annals of Nietzsche Baroque”に、味の概念は無い。素材として説明はついていたが、あくまで食べられるか否か程度しか記述はなく、コマンド選択で調合して使用すれば体力とスタミナのパロメーターが向上して、それで終わる。その程度の存在だった。だがもうここはゲームではない。

「本当に面倒臭い……」

「まあそう言わないで。故郷の食事に括るのは解るわ。気力になるもの」

甘いシールドルが炭酸水を使ってみるのは？ 唐突にゼロスの後ろから声がかかる。と、オフィーリアが顔を覗かせた。

「ああ！ そうね、炭酸水なら味がそう無いし。いいわね！」

メグは手を叩くと、さっそく試してくるわ。そう嬉しそうに言いながら1階の調理場へと去って行った。

「炭酸水ならいいんすか？」

空いていた席に腰かけるオフィーリアに、ほむほむらぶは聞いた。さっそく芋餅を口にしながらオフィーリアは肯く。

「ガスは二酸化炭素だ。発砲した泡が生地を膨らませるのことに変わりない。多分食感が多少モチモチするが、その後また揚げるし上手くはいくんじゃないか？」

「へーそうなんだー」

「ふうん。それなら次のも楽しみね」

咀嚼をするオフィーリアの代わりにゼロスは答える。納得する2人を余所に、ティーザラスは待ち切れなさそうにテーブルを叩いた。

ここはゼロスが経営する食堂の2階、プレイヤーしか立ち入ることの出来ない大広間だ。

今日は久々にオフィーリアが来るというので、店を早々に切り上げて、ゼロス達ギルドメンバーと切り盛りを手伝ってくれているメグ達ギルドのメンバーで宴会を開いた。

そして、芋餅をリクエストしたティーザラスの思わぬ括りにゼロス達は対応する羽目になったのだった。

「しかし旨えわ、この芋餅」

「だからあ！ これは芋餅じゃないのッ！」

既に出来上がっているバルサが機嫌が良さそうに呟くと、すかさずティーザラスは叫ぶ。

呆れた様子で見えていたゼロスがティーザラスの前に別の料理を押しやる。

「わかった、わかった。今メグさんが作ってるから、大人しく待っつけ」

「ううゝ」

不満そうに頬を膨らませて、渋りながら食べた。途端、破顔して料理をかき込む。現金なティーザラスの有様に、今度こそゼロスは脱力した。

「味わって喰えよ、このお子様が」

「ゼロスさん。お酒足りないみたいなので、地下から持ってきていいですか？」

隣のテーブルにあった、空の小瓶をまとめて片づけていたユウが小首を傾げて聞くと、ゼロスは肯いた。

「ああ、エールは樽で上げてくれ。ワインは瓶の方で頼む」
「はい！」

可愛らしく手を上げて答えるユウに、落ち着かない様子それを手伝いつつ見ていた男達の内の1人、レザリックがすかさず席から立ち上がり、声をかける。

「ユウさん、俺手伝いますよ。樽なんて重いもの、ユウさんに持たせられないっす」

「ええ〜！ 手伝ってくれるの？ 嬉しいな！」

「あ、俺も手伝います！」

「大丈夫、みんなは食べていいよう？ あ、でも瓶を片づけてくれると嬉しいかな？」

出遅れた男達がつくりと肩を落とすと、レザリックが鼻を鳴らした。しかし、頭一つ背の低いユウに上目づかいで微笑まれたとたん、顔が赤く染まる。レザリックは焦った様子で掌を握り、開き、何度も繰り返し、上ずった声で答えた。

「と、当然すよ。こういう時の男手は、俺使ってくださいよ」

「ありがとう！ レザって優しいなあ。じゃあ、一緒に行こうか？ 私が瓶を持つね」

「だ、大丈夫ですか？」

心配するレザリックに、ユウは袖を捲るとその白く、柔らかそうな細腕を見せつけた。

「瓶ぐらい持てるよ〜。こう見えても私、腕力値高いんだから！」

「っ……で、でも俺、聖騎士で本気で腕力値高いんで！ いつでもユウさんのこと手伝いますから！ 無茶しないでくださいね」

ユウは動揺するレザリックの背中にまわると、はいレッツゴー！と元気よく声を上げて背中を押したまま下へと降りて行った。

「なあに？ アレは」

舌を出して吐くようなジェスチャーをするバルサに、ほむほむらぶが軽く肩を叩いて答える。

「青春だよ！ 青春！」

「そうそう、異世界でボーイミーツガール！ 青春しちゃってるのさあ！」

「バルサも青春しなよ！ 青春！」

「はあ？ アレのどこが青春なのよ」

顔しかめたバルサに、すっかり機嫌を回復したティーザラスは指を立てて高説ぶって語る。

「恋愛は青春だろ？ こう、街角で悪者に追われる子をたすけたりとかさあ、奴隷に感情移入して身請けしちゃうとかさ！ ハーレム作らないと！ なんてたってここ、異世界だしさあ」

「あと、しつこくナンパされてる子を男らしく庇ったりもしないと！」

楽しげに語るお祭り2人組を鼻で笑うと、皮肉下に言う。

「サブマスじゃあるまいし。ハーレムとか馬っ鹿馬鹿しいわ！ 大体私もアバターと性別違うっての。恋愛するなら女のアバター使えわ」

「ええー！ そこはサブマスたち前例に習おうよ」

アホくさっ！ バルサは毒づく、グラスの酒を呷った。

「黒そうな青春だな……」

全く理解し難い。寒々とした光景を本人の意思とは裏腹に目撃したゼロスは、何度も頭を振り呻いた。

「真実を知った時が青い時代の終わり。そして修羅の始まりだわ。そう思わない？ ゼロス」

同意を求めた割には、心底どうでも良いような口調でバルサはゼロスに言い放つ。

グラスの中のワインをゆっくりと含んで飲み込む。そうしてオフイーリアは周りの様子を、ただ微笑んで見ていた。

「それにしても料理に味があるの、ほんといいなあ。早くフルダイブ技術が出来て、ゲームに実装されるといいのに」

「お前……。今この状態が正しくフルダイブだろうが……」

この期に及んで運営に要求する態度に、ただ啞然としたゼロスを見て、ティーザラスは、あっそか。と抜けた声を出した。

「フルダイブか……」

思わずほむほむらぶは言葉をこぼす。

（どちらもありえない世界、だ）

そう考え、そして思い出した。

——ようこそ”Annals of Netzach Baroque”の世界へ！

さて、このゲームをプレイしたいのなら、方法は3つある。

まずはいつでもどこでも手軽にプレイの廃人製造機こと携帯ゲーム端末、自宅で手軽にVRが可能なHMD、そして、高額だがVR投入感の強いポッド、だ。

携帯端末は2画面のゲーム機で、別売りのHMDを繋げばなんちゃってVRとしてゲームが楽しめる。ネットインフラが充実している現代では、いつでもどこでも出来て便利だ。ただ何分携帯機なので、バッテリーやラグの不安がありパーティー募集などで嫌煙されたりする場合がある。注意しよう。

また、操作形態が他の2つと激しく違うので、これも慣れが必要だ。下画面がタッチディスプレイなので、使いやすいようカスタマイズする必要があり、少し手間がかかるのがネックだ。

しかし廃人には何時でも出来て大変ありがたい。対応ソフトも安いし、大量に発売している。ゲーム好きなら買っという損はない。

HMDは部屋に設置した据え置きゲーム機体と接続して楽しめる、家庭で出来るVRだ。使用する際、ネットへの接続許可を忘れないように注意すること。

ヘルメット状のHMDをかぶり、両手先にグローブ状のコントローラーを付ける。視線の動きと脳波を感知し、コントローラーでコマンドを決定するこのシステムは、実は、歩く、という初步の動作

が一番難しい。足にコントローラーをセットしないからだ。また気張るあまり、現実で激しく頭や手を動かして大惨事を起こしたりする。ご使用の際、周囲にはご注意ください。

そんなわけで、合わない人間はさっさとポッドに移行する。HMDは手軽にVRが出来るといっても、人氣が微妙だったりするのはこのせいだ。対応ソフトも地味なのが多いしね……。そんな時にはHMDを使わないゲームを楽しもう。ストアからゲームを24時間購入できるぞ！

最後に一番人氣のポッドだ。

これは家庭では出来ない。ポッドが設置された施設に行つて、1時間幾らで部屋を借りる。微妙に高い。借りられるのは最大12時間までだ。これ以上やりたくても、健康上の理由から断わられる。他の施設に行つたところで、一律データ管理されていて借りるとは出来ない。廃人舐めてんじゃねえぞ。クソが！

そして、残念ながら16歳以下の使用は出来ない。ガキは指を咥えて誕生日を待つか、他の方法を選ぼう。

さて、借りた部屋の中にはカプセルのような機械が置いてある。これがポッドだ。ポッドを覗くと、中がコクピットのような様相になっていて、操作に戸惑うかもしれない。が、それらをフルに使用することは、少なくともRPGではない。あれは現代ゲームの花形ジャンル、FPSの為のものだ。

荷物は持ち込まず、部屋に置くこと。先にトイレに行くことを忘れずに。また部屋の鍵は必ず掛けること。以前施設内で、ネットランキング絡みの殺人事件が起こったこともある。凡人の嫉妬は怖いなあ。

ポットの中央にあるシートに座り、右手にあるスロットに受付で提示したIDカードを差し込む。

IDカードを持ってない？どこの国の人だよ。正規入国してから

出直せ。

とにかく、緊急脱出用のレバーが座席の下にありますよ、というアナウンスが目の前のでかいディスプレイに表示されて、自動でポッドが閉まる。

あとはディスプレイの説明に従ってやりたいゲームを選ぶか、もしくは受付も買えるゲームカードを差し込めばいい。頭上からVR用のHMDが降りてくるので、それを装着してシートの所定位置に手足を置く。位置は自動で調整してくれるが、もちろん任意でも可能だ。あとは存分にVRの世界を楽しんでくれ。

ああ、あと注意が1つ。3種のうちどの方法をとろうとも、ID管理されていて1日24時間で18時間以上のログインは出来ない。AM4時にリセットされるので、それまでしっかり喰って寝る。以上が楽しい廃人の始め方講座だ。

——さあ、どれを選ぶ？

おそらく——まだ完全に確認したわけではないが、こちらの世界に転移されたのはポッドとHMDでプレイしていた人間の一部だけではないのか？と、そう思った。

少なくとも、俺はHMDでプレイしていた。ギルメン達もそうだろう。ポッドは制限時間が邪魔すぎるし、使用料金を払うぐらいなら課金アイテムを買いたい。

あの後、メグさんのギルドの人間がポッド使用をしていたことを確認した。ギルマスの身内もポッドからこちらに来ているらしい。

また、携帯機から来た人間がいなかったのは、携帯機プレイ

専用の知り合い——こいつも廃人だ——が居なかったからだ。

もつとも、そう決めるには例が少なすぎる。何よりボットもHMDも、あの移転した時間にプレイしていた人間が、必ずしもこちらに来たわけではないらしいからだ。何かしらの法則があったのかもしれない。

「先輩。俺小さい頃、ゲームっていずれフルダイブになると思ってたんすよ」

「脳から脊髄を通る信号を全部変換してうんたらかんたら……で、フルダイブだったっけ？」

「そつす。なのに、ポットですら未だにコントローラー装着してるって感覚あるんだもんなあ。あと何年経ったらフルダイブでゲーム出来るんだろ？」

無邪気にばやいたら、笑われた。

「お前、首吊り死体って見たことある？」

「はあ?!」

唐突な話題変換に、思わず目をかつ開いて顔を凝視してしまった。

「全身の筋肉に対する信号がカットされた状態。力が入らないから失禁は勿論、弛緩した肛門から大便やら内蔵やらが重力に従って漏れ落ちてる。……フルダイブってそういう事よ？」

激しく動揺し、必死に否定しようとしたが、いつか見たその光景が目には浮かんでとっさに言葉がでない。いっそ優しい笑みを浮かべて、畳みかけるように言われた。

「お前ゲームやりながらウンコ漏らしたいわけ？ この変態ッ！」
「ぐえっ……！」

変態と罵られ、存外のショックを受ける。思わずヒキ蛸のような呻き声を上げて、悶え転がった。

「ま、オールカットした信号の代わりに、機械が筋肉の状態を維持させれば大丈夫なんだけどね」

「うわぁ……。ひでえ。マジひでえっす。ビビりましたよ。マジで」

——かつての世界でした、会話だ。

そして今、正にフルダイブを味わっているわけだ。喻え望まぬ形だとしても、ゲーマーとして、廃人として、体験できた事自体は喜ばしい。喜ばしいが、それだけだった。

いずれこの不思議な世界が終わる時がくるのか、それは移転されたプレイヤーの誰しもが解りはしないだろう。

ギルマス達がなにかしらの検証を進めているが、しかしそれに今、自分が関わる必要はない。

ほむほむらぶはそう結論づけると、バケットに齧りつく。

「ほむう……。俺にも酒くれよう」

「んーふー」

追加されたバゲットを口一杯に頬張り、ティーザラスに酒を接いでやる。酸味のあるパンの味に、先ほどメグが言っていたことを思い出し、ほむほむらぶは、これがそうなのかと納得した。

「このパン酸っぱーよ、ゼロス」

「添えられたビーフシチューに浸して喰え！ まったく、少しは考えろよ、このお子さま達め」

寄越されたスープ皿を受け取り、礼を言う。肉ばかり集中してがつつく2人組にゼロスは呆れた口調でサラダボウルも押しつけた。

「だから、野菜も喰え！ 栄養も考えろっての」

「ええ〜。ゼロス父ちゃん俺野菜キライ」

ティーザラスの両こめかみを、無言でゼロスは決るように押した。コントのようなやり取りに、周囲から笑いがこぼれる。

「異世界楽しいおす！」

「はあ？ いきなり何言ってるの 안타」

「ういっ！」

だってみんな居るし、楽しいよ！そう高らかに宣言すると、ティーザラスは軽やかに笑い、大きく満足のため息をついた。

——そして、
今日も移転者は異世界で笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3520y/>

異世界移転者の凡常

2011年11月23日22時46分発行